

【非営利活動／イベント運営】

Web 制作業界の「人と人をつなぐ」——CSS Nite を支えるサイボウズ Live



Web 制作業界の「人と人をつなぐ」

CSS Nite は「Web 制作者にとって有益なトピック」の共有を目的としたセミナーイベントだ。Web 制作や Web 担当者にはおなじみのイベントであり、開催したセミナーは 200 回以上、参加者数はのべ 3 万人を超えている。

同イベントの運営を仕掛け、Web 業界の進化をけん引してきたのが、鷹野雅弘氏（株式会社スイッチ）である。CSS Nite の運営に加え、Web 制作や書籍執筆など、常時 20 以上のプロジェクトを回している。鷹野氏からは、種々の関係者を巻き込み、動かす"実行力"が伝わってくる。

そんな鷹野氏の仕事の屋台骨を支えているのが「サイボウズ Live」だ。コラボレーションツールを巧みに使い、CSS Nite に懸ける思いと Web 業界の人々の期待を力強く紡ぎ続ける。

Web 業界をより良い場所に――CSS Nite に込めた思い

鷹野さんは CSS Nite を立ち上げ、Web 業界をけん引する立役者としてご活躍なさっています。CSS Nite が誕生して今に至るまでの経緯や、イベントに対する思いをお聞かせください。

鷹野：CSS Nite が産声を上げたのは 2005 年 10 月です。それまでは単発で出演していたのですが、「シリーズものをやってみませんか？」とアップルストア銀座から提案を受けました。取り組んでいた CSS について、僕はホストとして「自分が話を聞きたい」という方をキャスティングしました。当時ブログが流行り始めたこともあり、登壇者や参加者同士が「あのブログを書いている人がいる！」と交流するようになったのです。

今でいう「コラボレーション」の場になっていたのかもしれません。この（人と人がつながる）化学反応は面白いなと思いました。その後はテーマを設けた長時間のセミナーを開催するなど、僕はイベント運営に注力していったのです。その結果、半年、1 年と続くイベントに育っていきました。



CSS Nite の様子

ご自身の学びをきっかけに始めた CSS Nite が、Web 業界の人同士をつなぐ場として機能していったのですね。その積み重ねが支部の設立、ひいては全国展開につながっていった。

鷹野：Web 制作業界に限らない話ですが、良質な情報を受発信できる場所は、東京と地方で大きく分断されています。現在、東京と地方では「人と人とのつながり」が生まれる機会や数に差があり、それを少しでも解決できればと思っていました。そこで、これまでのノウハウやモデルを横展開し、名古屋や大阪でも CSS Nite を開催してきたのです。

「地方イベントは人が集まらずに失敗するのではないか」と思っていましたが、いざ開催すると 50 人、100 人と集まっていただけ。同業界の人とつながりたいという思いは、どこにいても同じなのですね。それ以降、地方開催の CSS Nite では現地の方が運営主となり、僕はイベントのノウハウやドキュメントの共有に徹してきました。

今では CSS Nite の開催は 200 回を超えるなど、Web 業界の耳目を集めるイベントとして

存在感を放っています

鷹野：僕自身は長らく Web 制作やグラフィックデザインの仕事に携わってきました。大切にしてきたことは、クライアントであるお客様、そして成果物である Web サイトを活用するユーザーを理解し、お客様の想定以上の提案をすることです。

CSS Nite を始めたきっかけは、「僕自身が Web 制作について勉強したいから、あの人の話を聞きたい」という個人的な思いでした。しかし、運営していく中で自ずと、イベントの参加者の想像を上回る価値を提供したいという考えに変化したのかもしれません。

今ではイベントを告知するだけで、多くの方に集まっていたけるようになりました。「CSS Nite でつながった方の会社に入るようになりました」などと言っていたら、素直にうれしいですね。

"すさむ"プロジェクト、メールの限界あらわに

鷹野さんは CSS Nite に加え、本業の Web 制作や書籍執筆といったプロジェクトを複数進行していると聞きました。各プロジェクトチームの情報共有や進ちょく管理はどうや
っていらっしゃったのでしょうか？

鷹野：基本的にメールやメーリングリスト、「Google グループ」を使っていましたが、僕が受け取るメールは 1 日当たりざっと 300 件以上。メンバーから「了解しました」というメールが来ると、未読メールがたまってしまいます。また「これ何だっけ？」と思ったメールをすぐに探すことも難しかった。

ロフトワークの林千晶さんは「メールは 1：1 のやりとりに向いているが、1：N になると情報量が階乗的に増えていく」とおっしゃっていました。まさにその通りで、プロジェクトメンバーも同様に感じていたのではないのでしょうか。

そのせいか、ML でのメンバーの発言が減り、ML 全体が「すさんでしまう」こともありました。返信が少なくなればメンバーのモチベーションが下がり、プロジェクト全体の雰囲気が沈んでしまう。そんな懸念が常にあったのです。

Web 制作などのプロジェクトの情報共有は、今でもメールが主流なのだと思います。しかし、迷惑メールが多く、大事な情報を見落としてしまうケースも増えています。情報共有のツールとして、メールはもう限界なのかもしれません。

メールに代わるプロジェクト管理ツールや情報共有ツールについては、ご検討されていた
のでしょうか。

鷹野：情報共有ツールとして Facebook や Twitter を試してみましたが、情報がフローで流れていくため、過去の情報を確認しにくいことが分かりました。「Backlog」などのプロジェクト管理ツールの導入も考えましたが、ツールを変えると仕事のやり方が変わり、一時的に生産性が下がることは自明でした。そのため、(本格導入を)ためらっていたのです。

 既読連絡は「いいね！」するだけ 確認作業を瞬時に

こうした中、プロジェクト管理ツールとしてサイボウズ Live をお使いいただいているとお聞きしています。改めて、活用法を教えてください。

鷹野：サイボウズ Live は知人の紹介で知りました。せっかくの機会だったので、「まずは試しに」と使ってみました。最初は手探りだったのですが、使い始めてすぐに、情報の共有や確認がメールに比べて楽だということが分かってきました。

例えば、掲示板のスレッドにインラインで画像を挿入・表示できる点はいいですね。キャプチャした画像を掲示板に添付すると、メンバーは添付データをわざわざ開かなくても確認できます。メールの場合、添付データを開かないといけません。あと、「あのデータ、どのメールに添付されていたんだっけ？」と受信メールを探す手間が減ったことは大きいです。

メンバーに使ってもらうために、どのような工夫をしましたか？

鷹野：プロジェクトメンバーには「半強制的」に使ってもらうようにしました（笑）。工夫した点としては、「掲示板」を重点的に使った情報共有を進めているところでしょうか。トピックに必要な情報を書き込んだり、提出物にフィードバックを残すといった使い方が主です。

掲示板のトピックは、「雑談」「企画・相談用」「告知・申し込み」「ちょっとしたやりとり」など、10以上の項目に分けています。実際に使ってもらうと、メンバーは「やっぱりこれいいね！」と言ってくれますし、掲示板の書き込みから仕事のアイデアが生まれることもあります。

掲示板のトピック名を決め、プロジェクトの進行度合いに応じて各掲示板で情報を共有する

一方、「ToDo 管理」や「共有フォルダ」はあまり使っていません（笑）。添付ファイルは共有せずに、掲示板のコメントに添付することが多いです。それでプロジェクトは円滑に進みます。

鷹野さんが伝道師となって、メンバーにとってサイボウズ Live を使いやすい環境を作っていたのですね。

鷹野：使いやすかったんで、自然と人に勧めてしまうのかもしれない。現在、CSS Nite 全体／名古屋や大阪などの支部／書籍執筆・編集や Web 制作など 20 以上のグループを作っています。サイボウズ Live でやりとりをしている関係者は 100 人を超えました。サイボウズ Live を使い続けることで、「メールが 1 通もない状態」実現するのではないかと感じるようになりました。

The screenshot displays the Cybozu Live web application interface. At the top, there's a navigation bar with links like Home, Groups, My Calendar, Messages, Connections, and Account. The main area shows a user profile for 鷹野 雅弘 (Takano Masahiro) and a list of groups including 鷹野家 (Takano-ke), スイッチ (Switch), and Illustrator 本 (技術評論社). A calendar view for August 11, 2011, is shown. Below the calendar, there's a section for 'New Information' with tabs for To Do, Polls, and Favorites. A grid of application icons is displayed, including icons for My Calendar, Messages, Completed Projects, Local Version, Bookmarks, Other, and many more. On the right side, there's a search bar and a news section. The bottom of the page contains a footer with links to 'About Cybozu Live', 'Usage', and 'Getting Started', along with a copyright notice for Cybozu, Inc.

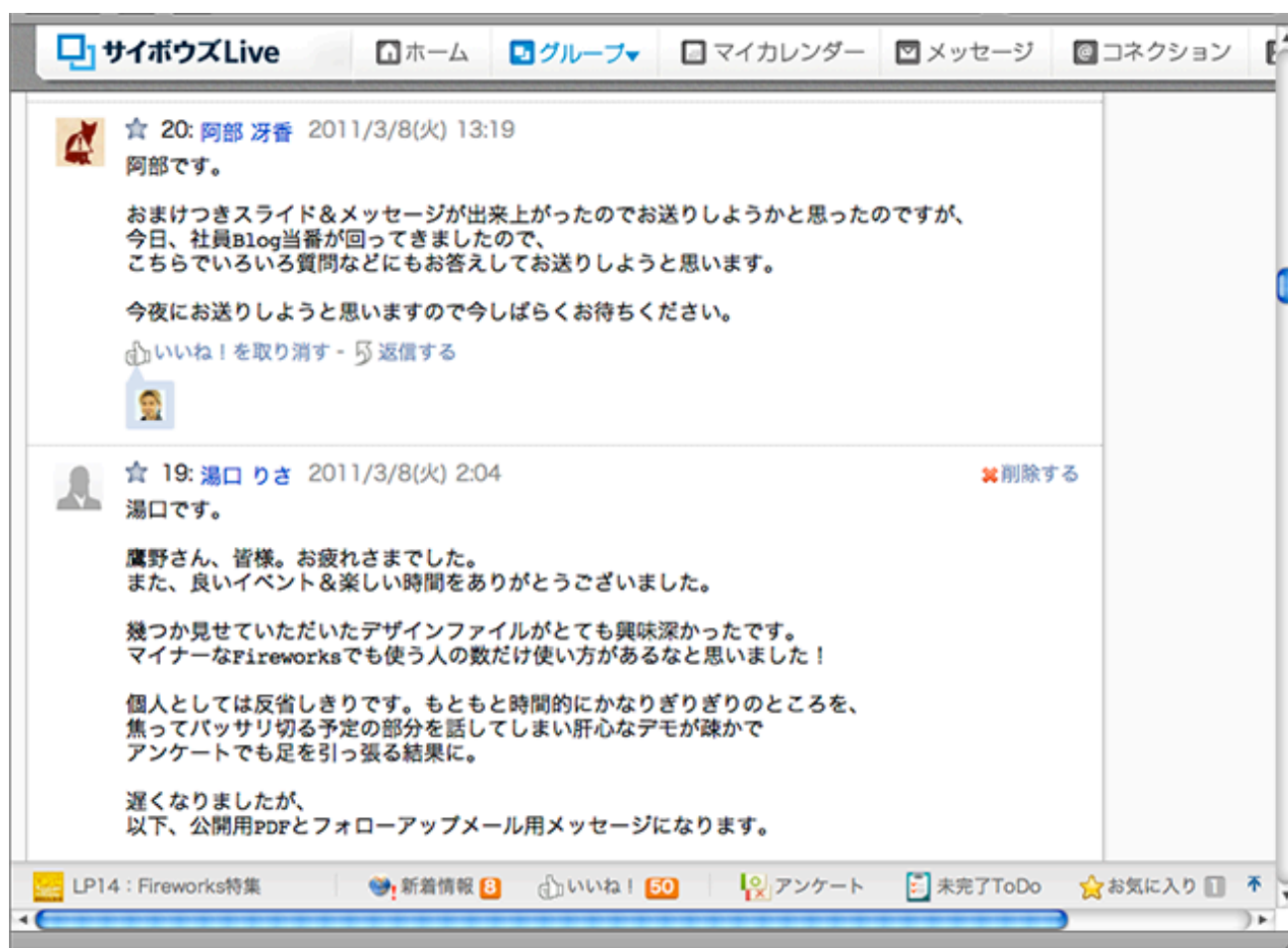
鷹野さんが入っているグループは 20 を超える

メールからサイボウズ Live に移行する上で、特にキーになった機能はありますか？

鷹野：「いいね！」ボタンですね。いわゆる Facebook 的な「いいね！」ではなく、コメントを読んだことを手軽に知らせるために、「いいね！」ボタンを押すことをローカルルールにしています。メールのように「了解しました」と連絡する必要はありません。ML だとメールが増えるので躊躇（ちゅうちょ）してしまいがちですが、これだと特にコミット度の低いメンバーが「とりあえず、状況は把握してくれているんだな」と安心できるようになりました。僕自身は、常に進ちょくを把握しておきたいプロジェクトに対して、コミットの度合いが高まりました。

「いいね！」はメンバーに自動通知されるため、全員でプロジェクトを進めているという一体感が可視化されます。担当者はプロジェクトの進み具合を直感的に理解でき、安心感を持つと思います。いいね！を見ていると、業務に対する当事者意識も強まるのではないのでしょうか。

各掲示板には、『いいね！ボタンは「読んだよ」ボタンとしてご利用ください』とただし書きをしているほど。それだけよく使っている機能です。



読んだコメントにはいいね！で応える。フッターナビには、プロジェクトメンバーからのいいね！が集まっている

サイボウズ Live で改善すべき点、欲しい新機能はありますか？

鷹野：複数グループに参加している人向けに、グループのアイコンを用途ごとに色分けできるといいですね。優先順位や仕事の種類に応じてアイコンを赤色や青色にタグ付けをするイメージで、グループやプロジェクトを視覚的に把握できれば、より使いやすくなるかもしれません。

サイボウズ Live は鷹野さんのプロジェクト管理にこういった効果をもたらしましたか。

鷹野：プロジェクトの全体像を全メンバーが把握できる点は効果的です。例えばクライアント企業と Web プロデューサー／ディレクターのやりとりは、掲示板で可視化されます。プロジェクトを実際に進めているコーダーやマークアップ担当の人も、プロジェクトの背景や意図を確認しながら、仕事ができるようになりました。

僕は、上下関係を作らずフラットに仕事に取り組みたいんですね。サイボウズ Live によって、みんなが「一体感」を持ってプロジェクトを回していけるという点が、改めてクリアになったかなと感じています。

Web 制作の地位向上を図り、Web の世界をより良いものに

ありがとうございました。最後に、鷹野さんの今後の活動や Web 業界の展望についてお聞かせください。

鷹野：株式会社スイッチを創業して 16 年、Web には 10 年以上コミットしてきました。そして今、「Web（サイト）はまだまだ生活に根ざしていない」という事実を実感しています。

例えば定休日や営業時間、アクセスマップといった基本情報を見つけにくい Web サイトは、まだまだたくさんあります。お店に興味を持ったユーザーがそのサイトに訪れたら、どう感じるでしょうか。Web には、改善の余地が多く残されているということです。

現状を変えるには、Web 制作に携わる人がユーザー視点を持ち、生活に必要な Web を作ることに尽きると思います。Web 制作はサイトという完成品に対価が発生する「成果主義」の側面が強く、「サイトを納

品して終わり」というのが一般的でした。しかし、今はアクセス解析で効果を測定し、数字に基づいてサイト改善やコンテンツ企画を行うことが標準になりつつあります。潮目が変わっているのですね。

Web サイトを掘り下げ、より良いものにしていこうとする提案が求められているのですね。こうした取り組みの積み重ねが、Web 業界の進化につながっていくと。

鷹野：Web が生活の必需品にならないと、Web 制作業界の地位は上がりません。僕は Web が好きだから、生活に根ざすようになってほしいし、Web の世界がもっと良くなってほしい。そのための Web を作っていきたいし、Web 制作者の手助けがしたい——。こんな思いを胸に秘め、仕事に臨んでいます。

(2011/08/18)